



本の泉社  
1700円＋税

## 『私流 演技とは わが役者人生の歩みとともに』

著・嵐 圭史

朝日新聞 2021.1.31

質、技と情への讃歌『五重塔』、色香と愛嬌に満ちた奇抜な古劇『毛抜』などが登場、かつて観た舞台を思い出させてくれます。

著者は17年に離座したあとも「圭史企画」を設立して現在も舞台活動を続けていますが、河原崎長十郎、中村翫右衛門らに続く前進座の第二世代として後進への何よりの助言の書となっています。

今年の正月も南座は前進座の新春公演で賑わいをみせていました。戦後、長十郎、翫右衛門らの時代から、新春の京都を飾る風物詩として、歳末の「顔見世」とともに何十年も続いているのは素晴らしい。その陰には圭史さんらが率先して広く民主団体や生協などに働きかけ、観客動員を図っていたことを思い出されます。

圭史さんはこの本とほぼ同時に『百姿猿乱 煌めきの役々』と題する舞台写真集(本の泉社)も刊行していますが、多くのファンは再び舞台での熱演を観たいと願っていることでしょう。

私は、かものがわ出版の編集長だった頃、圭史さんの著書『怒る富士が行く』『いま ふれ愛』など何冊か手がけました。圭史さんの校正(何度も朱が入る)には正直泣かされましたが、これも「完璧」を目指し妥協を許さない性格によるもので今となっては懐かしい思い出です。

(湯浅俊彦・元かものがわ出版編集長)

舞台生活70年、長く劇団前進座の大看板を勤め、歌舞伎から現代劇まで、数々の名舞台を演じてきた著者が、自在な筆致で描き出した演劇空間。役者魂に貫かれた渾身の書は読み応えがあり魅力的です。

とりわけ2000年6月、龍谷大学での講演「蓮如役者の『歎異抄』は『蓮如』の原作者・五木寛之氏の凄さもリアル語っていて興味深い。

この本にはほかに『解脱衣櫃』、『文朴と長英』、会話の妙とダイナミックな様式美『鳴神』、新歌舞伎を特徴づける『修禪寺物語』、ユニークで明るい舞台空間『およごん盛衰記―熊楠面白万華鏡』、江戸の職人気

## 妥協を許さない「役者魂」